

死なないための住宅

～三鷹天命反転住宅 In Memory of Helen Keller～

カラフルな内装、表面が凸凹で傾斜のある床、球体の部屋、開放的なバスルーム。どの要素をとっても私たちが抱く「住宅」の固定概念を覆す住宅が、東京都三鷹市にある。これは、二人の芸術家・建築家荒川修作とマドリン・ギンズの信念が込められた住宅だ。現在は、賃貸住宅として、また一部をウィークリーマンションとしても使用されている。

荒川+ギンズは、単にエキセントリックで面白い建物を作ろうと思ったわけではない。1936年に名古屋市に生まれ戦争の中で育った荒川は、多くの人間の死を直に見ることで酷く心を痛めたという。この戦争体験から彼は、「人間の死を克服すること」を生涯のテーマとし、芸術家としてあらゆる作品を手掛けた。1961年にはその活動拠点をニューヨークに移し、のちに公私ともにパートナーとなるマドリン・ギンズと出会う。「人間の死を克服する」という熱い思いに突き動かされた彼らは、人間の活動拠点である住宅に注目し、この三鷹天命反転住宅を建てると決めたのだ。天命反転住宅の名前には、「天命＝人間の死」を「反転＝克服」という意味が込められており、この住宅が「死なないための住宅」と呼ばれるのはそのためである。

荒川+ギンズは、人間が「死なないため」には、身体に絶えず作用を及ぼし潜在的な感覚を刺激し続けることが重要であると考え、「人工的な自然」の空間を再現することを目指したと三鷹天命反転住宅の支配人である株式会社 ABRF の松田剛佳さんは説明する。そのため、この住宅の造りは全て自然界の法則に従っている。例えば、表面が凸凹で傾斜のある床は自然界に真っ平らな地面がないことを表している。全部で14色に塗り分けられた内装や外装はどこから見ても同時に6色以上の色が自分の視界に入るように配色されている。人間は6色以上の色を同時に見ると色を色として感じなくなるため、物体を色で識別するのではなく、その本質に注意を向けられる。この部屋に入ると触覚、聴覚、視覚といった五感のすべてが研ぎ澄まされるかのようだ。

建築物の構造は時として人間生活に大きな影響を与える、と松田さんは指摘する。例えば天命反転住宅には各部屋を遮るドアがない。これが「引きこもり」を生まない構造になっている。死角となる場所の無い開放的な校舎を学校が作れば、「いじめ」はなくなるかもしれない。

荒川+ギンズの思いやこの住宅についての受けとめ方は人それぞれだ。

「この住宅を見て感動して涙を流される方もいるし、住むのは絶対に不可能だという方もいますよ。」と松田さんは話す。

しかし、この住宅が現在の住宅概念に一石を投じたことは確かである。

濱口亜沙子、マルコム・ソルス